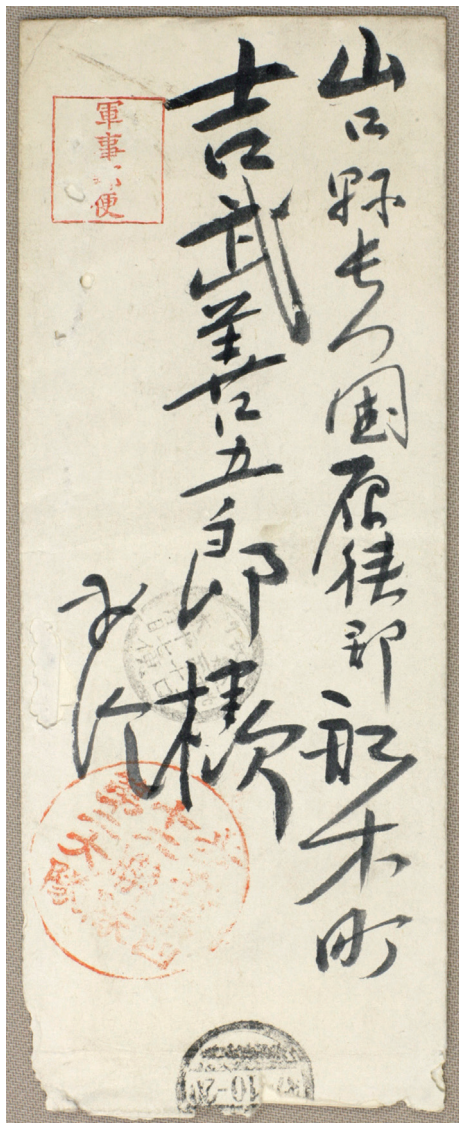


日露戦争（軍事郵便）



* 吉武家文書256「出征第5師団歩兵第42聯隊吉武安一書簡」

解説

厚狭郡船木町（現在の宇部市）出身の吉武安一は、日露戦争前、1900（明治33）年12月に山口歩兵第四十二聯隊に入隊し、3年間の兵役を終え予備役に就いた後、日露戦争のために臨時召集され、奉天付近の戦いで戦死しました。当館には、彼が営内の日々の様子を書き記した日誌や、家族や友人と交わした軍事郵便が残されています。これらの資料は、戦地での兵士の肉声を伝えています。

次の書簡は、1901（明治34）年1月1日付の同郷の先輩石村新一から吉武安一にあてられたもので、入隊したばかりの後輩を気遣って、先輩としての助言をおこなっています。以下はその抜粋です。

「二伸、申すもおろかながら、入営後ずい分熱心を旨として日夜おこたりにく御勉強なされて御昇進之程、かげながら祈上奉候、軍隊と申す所はゆだんのならぬ所なれば、すいぶん御注意なされて、ばんじ二御きを付けられ度候、先づじふんの官給品及び所持金を常二御注意なされ候、初年中は苦痛二わ候へ共、其所を勤にんなされて、先づ初めの程が第一二候間、初め見込たれば十八九迄、我手二入れたる物の如く、其後ハ仕合能くして、遂二わ中隊一、若しくわ大隊一、大きく云へば聯隊一とも申べき戦責をあげられん事こそたのみ奉候」（『山口県史』史料編近代2収録）

写真は、1904（明治37）年10月20日付で父吉武善五郎にあてた書簡で、はね弾にあたって負傷したことなど近況を報告しています。以下はその抜粋です。

「時下秋冷の候、其後久々御無音二打過申候処、御一同様倍々御清祥御暮らし被遊候段、奉大賀候、次二私義無事従軍罷在候間、乍憚御安心被下度候、是迄モ早々御伺可仕筈の処、去ル七日より軍ハ運動ヲ開始シ、今以テ戦闘中ニ有之、本日漸クー寸の暇アリ、陣中露堂の内ニ於テ御安否御伺申上候、小生モ去ル十日の戦争ニテ敵ノ跳弾飛来テ左胸乳房ヲ打撲致候、尤モ傷ハ附カス、只黒死ニナリシ位ニテ有之候間、御安心被下度候、十一日朝の戦闘ハ非常ニ激戦ニ有之、数多の死傷者出来、第八中隊ニアル滝山悦三氏ハ右腕ト顔ニ負傷セラレ申候」（『山口県史』史料編近代2収録）